

Title	<論文>テオトコスへの信仰とイコンの関係性--フロレンスキイ的アプローチ
Author(s)	イボウ, ブラジミロブ
Citation	キリスト教学研究室紀要 = The Annual Report on Christian Studies (2016), 4: 75-85
Issue Date	2016-03
URL	https://doi.org/10.14989/210123
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

テオトコスへの信仰とイコンの関係性 —フロレンスキイ的アプローチ

ブラジミロブ イボウ

1. 問題

キリスト教の図像学の基礎が、キリスト教の時代の最初の 3 世紀間に形成されたのだと、美術史学者コンダコフ・ニコディム＝パヴロビッチ (1844-1925) は著書『生神女の図像学』の序章において述べている¹。一方、テオトコスへの崇拜がシリア、エジプト、アナトリア、ローマや古代世界のその他の地域に広まったのは、1 世紀の終わり頃であるとしている²。キリスト教学やそれと関連する分野の研究家たちは、イコンへの帰依と聖なる童女への信仰を一緒にして研究するという傾向を持っている。それらの二つが関係している理由は、二つ挙げることができる。その一つは歴史的な理由で、人々はこれらの帰依をおよそ同じ時代に発展させたことである。もう一つは神学的な理由であり、これらの二つは本質的な関係にある。歴史的な研究は大変興味深いものではあるが、本論文においてはこれらの二つの帰依における神学的共通点を取り上げようと思う。キリスト教におけるテオトコス (神の母、聖母マリア) の位置付けは、長くキリスト教学において中心的な問題であった。イエス・キリストは私たちに救済をもたらし、教会がキリストの身体であるのに対して、聖母マリアがなぜ必要なのかという問いには、二通りの答えが考えられていた。それらはキリスト論的答えと教会論的答えであった³。しかし本論文では、この議論には入らず、アヴェリル・キャメロンの言うテオトコスの「取り持つ力」のみを取り上げ、それをイコンと比較する。ここで当然ながら、「イコンとは何か」という問題が重要になってくる。このような問いに答えることは本論文の範囲内では不可能であるため、「神と人間の二者の間に取り持つもの」としてのイコンとは何か、という問題を取り上げることにする。1938 年にフランツ・ディーキャンプは、『*Analecta Patristica*』⁴という古代の選集を出版し、その中には、それ以前に出版されたことのない資料がある。特にイコン論研究と関係してくるのが、エフェソスの大主教イパティオスの『*Συμμικτὰ Ζητήματα*』に編纂されているアトラミティオン主教のユリアン宛への手紙である。主教ユリアンは大主教イパティオスに、どのようにしてイコンへの崇拜に対応すべきか尋ねる。大主教イパティオスはイコンについて、「叡智的で靈的な光」(νοητὸν καὶ αὔλον φῶς) であると答える。つまり、イコンにも神と人間を

取り持つ力はある。それは特に、聖堂の奥の至聖所と、聖堂の中央の聖所部分を仕切るイコノスタシスについて言える。

「聖堂のなかに聖像（イコン）があるのは、正教会の最も著しい特徴のひとつである。聖像には深い意味が秘められ、体系的に聖堂のなかに配置されている。正教会のいかなる聖堂にも、奥の至聖所と聖堂の中央の聖所部分を仕切る木か大理石で造られたイコノスタスとよばれる聖障がある。」⁵

このテオトコスとイコンの両立場が共通していることは、昔から言い伝えられていることである。しかしなぜそうなのか、本論文ではフロレンスキイ・パヴェル神父⁶の思想を取り上げながら、明確な答えを求めていくことにする。

テオトコスとイコンへの信仰を比較するいくつかの有益な研究がある。なお、パヴェル神父の著書とコンダコフの寄稿の他に、非常に役立ったのは、ビザンチウム研究者であり、オックスフォード大学ビザンチウム研究所所長を務めていたデイム アヴェリル・キャメロン教授とピーター・ブラウン、ノーマン・ベインズ、ポール・アレキサンダーの論文である。⁷

2. イコンとテオトコスへの信仰

テオトコスとイコンへの二つの信仰の誕生をどのように理解すればよいのか。古代末期には新しい宗教性が誕生した。エジプトの砂漠で、大アントニオスの苦行から始まった修道院制度の中心である聖なる修道士は、神と人間の間を取り持つ役割をする者として考えられるようになった。⁸一方、歴史学者の間では「ヘレニズムを中心としたローマ帝国ゆえにビザンチウム帝国は717年に始まった」⁹という議論が説得力を持つ。実は、717年3月25日、コンスタンティノーポリス総主教のゲルマノス1世は、レオン3世イサウロスでローマ帝国の王位につかせた。¹⁰イサウリア王朝の初代皇帝のレオン3世は、イコノクラスムを実施した皇帝でもあった。しかし、なぜそれがビザンチウム帝国の始まりとなったのか。ここでは細かくは分析しないが、その時代における都市空間の変化と国家構成の改革は重要な特徴であり、新しい国家構成が出来上がった。この新しい国家構成は宗教的なものであり、国家における社会関係を宗教に基づいて再定義せざるをえなかったのである。例えば、皇帝は「新しいダビデ」¹¹であると考えられるようになり、平信徒と聖職者の混交である新しい最上流階級¹²が誕生した。それは中世時代における国家形成への第一歩だったと言えよう。この新しい環境の中で、皇帝たちは霊的保護者を必要とし、その役割を最大限に果たしたのが、神の母¹³である。6世紀のビザンチウム帝国の首都コンスタンティノー

ポリスの宗教的・政治的環境の中で「童女の信仰は独特な発展を遂げ」¹⁴、それによって共通のビザンチウムのアイデンティティが築き上げられた。626年にコンスタンティノーポリスがアヴァール人、ペルシア人、スラヴ人の襲撃を受け、この最も過酷なときに神の母自身がビザンチンの人々を率いた。従って、童女が「コンスタンティノーポリスの独自の守護者」¹⁵となるのは自然なことで、「街の宗教的な生活の最も重要な立場について」¹⁶ということである。テオトコスの方に頼ることはそれ以後もずっと続き、イコンを否定し破壊していたイサウリア王朝の皇帝たちは、テオトコス信仰に関しては肯定し続けた。本論文ではテオトコスとイコンへの二つの信仰には共通点があるという基本的なスタンスを主張しているのだが、これらの二つを一括りにしてはいけな。むしろ、「テオトコスとイコンの違いとは何なのか」、という問いに対する答えを探すために、イサウリア王朝の宗教的基礎づけを研究することが重要な課題となってくる。

新しい宗教性の象徴であった修道士たちは力を増していき、新しい国家形成を象徴していた皇帝や主教たちの間では、衝突が避けられなくなった。イコンの崇敬者たちは、イコノクラスムを実施したイサウリア王朝の皇帝たちを「アジア的思想」¹⁷を広めようとしたことを批判した。表信者聖テオファネスは『年代記』の中で、イコンを攻撃した皇帝を「このサラセンびいきのレオン」(απ'αυτόν τον σαρακηνόφρονα Λέοντα)¹⁸と名付けた。表信者聖テオファネスにとって小アジアに位置するイサウリアまたは、シリア北部のどちらかの出身であるイサウリア朝の皇帝たちは、サラセンつまりムスリムの影響下にあったので、イコノクラスムを起こしたのである。ピーター・ブラウンによると、アジア人でありながらレオン 3 世イサウロスと彼の主教たちは、コンスタンティノーブルで教育を受け、完全に東ローマ帝国の文化を有していた。つまり彼らには「Orient oder Rom?」¹⁹というジレンマは皆無であった。しかし、ギリシア的世界観によると神が私たちの世界を創造したため、被造物も聖なるものだと認めざるをえない。そのような意味で、テオトコスへの信仰の重要な要素とは、テオトコスのイコンに対する敬拝であり、「童女への信仰の誕生を、イコンへの信仰の誕生から取り除くことは出来ない」²⁰と結論付けなければならない。第 3 章においてパヴェル神父はこの「ギリシア的世界観」をどのように理解しているのかを明らかにする。

永貞童女への信仰は、ビザンチウム教会の最も古い時代まで遡る。ヒルダ・グレイフは、マリア神学への貴重な寄稿である著書『われらの婦人への献身』の中で、「マリアの仲介を求める祈祷は、非常に古い習慣」²¹だとする。それはコンスタンティノーポリスにおけるマリア聖歌の豊かな伝統²²の中の最も優れている聖歌の一つで、530 年以前²³に作曲されたアカフィスト祈祷の中で、童女は「天国の扉を開く鍵」(Παραδείσου θυρών ανοικτήριον)、「聖なる機密への扉」(σεπτού μυστηρίου θύρα)、さらに、「神が舞い降りてきた天上のはしご」

(κλίμαξ επουράνιε, δι' ης κατέβη ο Θεός)、「地上と天国をつなぐ橋」(γέφυρα μετάγουσα τους εκ γης προς ουρανόν)のように例えられる。当然ながら、ある観念や表現がマリア聖歌に書かれているからといって、それが自動的に神学的教義になるということはない²⁴が、それらは宗教的意味を正確に伝えてくれる。アカフィスト祈祷におけるはしごの概念は大変な影響力を持っており、はしごとしての童女という理念こそが、彼女を神なる者の最も本質的な象徴としている。すでに述べたように、童女マリアによりキリストが身を藉り受肉した²⁵ことで、彼女はキリストの一部であるということになるのかどうか、また神の呼び掛けに「お言葉どおり、この身に成りますように」(γένοιτο)²⁶と肯定的に答えたマリアは最も理想の人間であり、創造の傑作²⁷であるのかどうかについては、ここでは深くは取り上げない。ローマ・カトリック教会の枢機卿であり、キリスト教学の思想家でもあったジャン・ダニエルーの解釈によると、聖母マリアは「宇宙的母、普遍的仲介者」(Mère cosmique, Médiatrice universelle)²⁸である。しかし、このように締めくくってしまうと、テオトコスと「神と人との間のただ一人の仲介者キリスト・イエス」²⁹の役割をどのように区別し、また理解すればよいのかが明らかではない。

一方、正教会の教義学では「仲介者」という言葉があまり見られないが、イコンにおける「仲介者マリア」は重要である。ロシアの美学者、美術史家、プーシキン美術館関係者のダニロヴァ=イリナ・エヴゲニエヴナ(1922~2012)は、著書『フェラポントフ修道院のフレスコ画』(1970)³⁰において、中世ロシアの偉大なイコン画家であるディオニシイ(1440~1502)が製作したフェラポントフ修道院のフレスコ画について述べている。生神女に捧げられている教会内の西側の壁には、生神女就寝祭をテーマにしたイコンが描かれているが、フェラポントフ修道院の中にある生神女誕生祭教会の西側の壁には、一般的な教会とは違い、「最後の審判」というイコンが描かれている。そのイコンはアカフィスト祈祷に出てくる「キリストの前の人間の擁護者」をテーマにしていて、四つのイコンから構成されている。南側のイコンは「神を生みし者」、西側は「仲介者」、北側は「女王マリア」、東側は「ロシアの守護者」である。つまり、正教会では「仲介者マリア」がイコンによって表現される。しかし、ここでは仲介者マリアについてそこまで深くは分析しない。なぜならばこれらの問題を正当に描写するためには、さらに長い説明が必要であり、この論文の範囲を大幅に超えてしまうからである。ここではマリアはキリストと人間の間で直接的な仲介者であり³¹、彼女の取り持つ力によって彼女こそが私たちの「神の前での最も影響力のある仲介者」³²であるということだけに止めておくことにする。この仲介者という役割により、彼女が私たちの守護者なのである。城壁が街を守るのと同様に、神の母が信者を守っている。テオトコスの保護は、抽象的なものではなく具体的なものであり、それは特定の場所と時間に限られる。例えば、彼女の力は特定の場所である彼女自身の街で感じるこ

とができ、またその神秘的力と直接触れたい場合は、彼女自身の教会でそれは可能になり、海外から侵略されたとき、国内にいる正教の敵が冒瀆するときに彼女の保護の力が現れる。

またテオトコスの保護の効果が、イコンという具体的な形において表現される。コンスタンティノーポリス総主教のゲルマノス1世の言葉によると、生神女は「眠らない仲保者、征服できない壁」³³ということである。童女への献身を説く者であった総主教のゲルマノス1世は、第一イコノクラスム危機の時代において、聖なるイコンのために戦った一人として記憶されている。

3. 証人と証人の証人

(1) 奇跡の可能性

すでに明らかになったことは、テオトコスと彼女のイコンには深い関係性が存在していることで、パヴェル神父がそれをどのように理解しているのかを取り上げることにする。しかし、その前に彼の思想の基本を把握する必要がある。そのために彼の若き時代の重要な書である『真理の柱と基礎』(1914)からの引用を試みることにする。

「実に聖なる教会の中で全てが奇跡である。機密（サクラメント）も奇跡であり、聖水式も奇跡であり、イコンの一つ一つもまた奇跡であり、祈禱も奇跡以外の何ものでもない。本当に、教会における全てのものが奇跡である。なぜならば教会の生活の一部分であるそれら全ては、恩寵から来て、神の恩寵が唯一奇跡と名づけてもよいものである。」³⁴

パヴェル神父の奇跡に対する信頼は、非常に重要なものである。実は同じ本の別の箇所では、ちょうどピュロンと懐疑主義の哲学的立場を説明した後、パヴェル神父は次のように述べる。「私自身には秘密の願いがある。私は奇跡を願っている。」³⁵しかし、パヴェル神父の思想における奇跡とは何なのかを、明確にせねばならない。彼がまだ数学科の学生だった1903年、『迷信と奇跡について』という記事を書くが、この記事がそれ以降のパヴェル神父の思想の重要な基礎となる。私たちが経験する世界中の全ての現象は、先に書いた引用で見たように、神の恩寵であり奇跡である。彼にとって、それを自覚し意識することで、宗教が誕生するのである³⁶。一方、迷信は悪魔的なものから来ている。パヴェル神父の解釈によると、迷信から誕生するものは、マジックまたはサーカスである。言い換えると、世界における悪とは神の恩寵のパロディである³⁷。『真理の柱と基礎』の中でパヴェル神父は、悪魔について、「神の猿」³⁸と定義している。この分け方がパヴェル神父の考える善と悪の問題の根本であり、また本論文では触れないが、イコンと遠近法に基づく絵

画の区別の根本でもあるのだ。神は奇跡を起こすことによって私たちの世界に直接触れる。私たちの世界と神の世界が接触する境目には証人がおり、その証人の取り持つ力によって私たちは神の世界を知ることができる。またこの証人を通して奇跡が起こりうるのである。

次にイコンに捧げたパヴェル神父の著書『イコノスタシス』を取り上げたい。その中ではパヴェル神父は、ロシアの詩人ミハイル・レールモントフの詩『祈り』を取り上げ、その中の「不安と不穏を持つ詩人の心」は、テオトコススのイコンに向かってテオトコスへの祈りの言葉を捧げている。パヴェル神父にとってこのようにしてイコンに祈る信者には、「イコンが生きているものになり、その仕事である高い世界への証人となることを行う」³⁹という時が来る。レールモントフはイコンの中で、この証人と出会うことができる。なぜならば「全てのイコンは奇跡を起こすものであり、つまりイコンは永遠への窓」⁴⁰であり、イコンとは、必ず「神の現実の特定の出来事として知られる」のである。

パヴェル神父は、1918～19年の冬にセルギエフ・ポサードで著書『ラドネジの克肖者セルギイの敬拝イコン』の中で、童女ホディギトリア（ギリシア語の Ὁδηγήτρια の意味は「導いてくれる者」）と、奇蹟者聖ニコラオスのイコンを比較している。ホディギトリアは神的母性の理想形であり、さらにコンダコフによると神の母のイコンの中心だけでなく、キリスト教のイコン製作全般の中心であるという⁴¹。この図像学的形は古代の時代から由来している。具体的な起源を探してみると、最も近いのが不死で結婚することのない童女アテナであり、彼女の女神としての形容語句は、教会が授けたテオトコスの名前と全く一緒である⁴²。この古代の道を辿っていくと、戦いの女神アテナの彫刻である ἡ Παλλάς は、女神と同一のものだと考えられていた。⁴³そしてパヴェル神父も、神的な存在とその礼拝対象となる像が一緒だという考えで、それをこれから追っていく。

パヴェル神父によると、ホディギトリアのイコンと奇蹟者聖ニコラオスのイコンはある意味において反対だということである。彼女の別世界の表情に対し、彼の集中しているその表情は、精神的なプレッシャーを感じている。ホディギトリアの表情は古代の美的価値において最高の美しさであり、古代の美の理想形そのものである。彼は古代ギリシアの理想と異なり、崇高的なものを表現している。彼女は天国からの贈り物を与え、彼はその贈り物を守る ἐπίσκοπος つまり、保護者である。「ホディギトリアは神の叡智であることに対し、奇蹟者聖ニコラオスは神の世界からの光に照らされているが、この世の知恵である。」⁴⁴ある意味では、ホディギトリアと奇蹟者聖ニコラオスは、私たちの世界と神の世界を結ぶはしごの両端にある。すでに述べたように、彼女は私たちと神を取り持つ仲保者であるため、私たちは彼女を通してしか神を知ることができない。彼女は、神の唯一の代表者であるとも言える。一方、ギリシア・ビザンチンとロシアの意識にとって奇蹟者聖ニコラオスは、聖者の理想形でなおかつ全ての聖者を代表していると、パヴェル神父は私たちに思い

出させてくれる⁴⁵。奇蹟者聖ニコラオスは、砂漠の教父たちや修道院の修行僧の苦行の目的である精神的な戦い **подвиг** ポドヴィッグを表現している。つまり彼は修行における行を代表している。導いてくれる聖なる童女ホディゲトリアは贈り物としてしか得られない神の恵なのである。パヴェル神父は次のように結論づけている。

「これらは二つの精神的「本来の像」であり、観察される二つの理念でもある。これらの像は、その前に佇み、祈りを捧げている古代人の祈禱者の内的生活を導いている。」

46

(2) 「本来の像」を意味するペルヴォオブラスの証人

生神女ホディゲトリアのイコンはイコン製作全般の基礎であり、奇蹟者聖ニコラオスは「数多くの聖者のうちの一人ではなく、聖者の **τύπος** であり、人類において、聖者であることを代表している」⁴⁷と、パヴェル神父は述べている。パヴェル神父はこのホディゲトリアと聖ニコラオスを、「二つの精神的ペルヴォオブラス」と名付けている。ここで、スラヴ語のペルヴォオブラスという言葉の意味を正確に理解する必要がある。このスラヴ語の言葉は、「一番目」、「本来の」という意味の「ペルヴォ」と「像」という意味の「オブラス」が合わさった言葉である。プラトンは『ティマイオス』の中で、世界はペルヴォオブラス (**παράδειγμα**) のオブラス (**εικόνα**) であると述べている⁴⁸。一方フィロンは、『世界の創造について』 (**De Opificio Mundi**) において、このプラトンの主張と創世記 1 章 27 節を結びつけ、「ペルヴォオブラスは神である」⁴⁹としている。教会の歴史においてこの関係性は、その教えの一部として認められている。ギリシアの神学者パナヨティス・ネッラス (1936～1986) は、イリネウス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネス、アレクサンドリアのアタナシオス、ニュッサのグレゴリオスなどの教父たちの歴史的伝統を次のようにまとめ上げる。キリストは神のオブラス (**εικόνα**) であり、人間はキリストのオブラス (**εικόνα**) である。つまり人間は、「オブラスのオブラス」 (**«εικόνων Εικόνας»**)⁵⁰ であるとしている。このようにして、パヴェル神父の思想における代表的な理念である上の世界と下の世界という二つの世界の境目が、明確になる。パヴェル神父によると「聖堂は上昇するための道、ヤコブの梯子であり、目に見える世界から目に見えない世界に導いてくれるが、祭壇全体はすでに目に見えない世界に属しており、世界から離れた領域、非世界的空間である。また祭壇全体は空であり、超越的知恵の存在する場所、知恵によって得られる場所、**τόπος νοερός**、さらに **τόπος νοητός** である」⁵¹。空である祭壇の柵が二つの世界の境目⁵² であるならば、一つ一つのイコンは、「上のペルヴォオブラスへの想起」⁵³ である。つまり、イコンはそのペルヴォオブラスの証人なのである。

パヴェル神父はイコン製作の画家を取り上げ、彼らのことを「哲学者」であると述べ、彼らは「自分らの手によって受肉したロゴスの証人である」⁵⁴としている。彼らは一般の信者より上の立場であり、従って慈悲や信仰の深さがより一層求められる。⁵⁵

すでに述べたように、エフェソスの大主教イパティオスが書いた、アトラミティオン主教ユリアン宛への手紙はフランツ・ディーカンプにより始めに 1938 年に出版されたため、パヴェル神父はこの資料の存在については、多分知らないであろうと推測する。しかしながら、彼がまるでエフェソスの大主教イパティオスの言葉を知っていたかのような主張をしている。大主教はイコンについて、「叡智的で霊的な光」であると言うが、パヴェル神父は『イコノスタシス』の中で「窓と光」という例えをしている。窓から差し込む光を見る時に、窓を見るのと同時に光そのものも見ている。つまり、イコンを観察している時に、私たちはペルヴォオブラスから差し込む「霊的な光」を見ている。つまり、私たちはペルヴォオブラスと直接に接触することができる。それによって、「イコンが生きているものになり」、またテオトコスとテオトコスのイコンは同一のものなのである。

4. 結び

本論文では二つの目的を設定した。その一つは、日本におけるキリスト教学の研究者や、それに関心を持つ人のためのパヴェル神父の思想の紹介である。彼は、ロシア、東欧以外の世界にはほとんど知られていない。しかし彼の思想は非常にユニークなもので、色々な意味で彼を研究する意味がある。

もう一つの目的は、テオトコスとイコンへの信仰を比較することである。キャメロンは、テオトコス信仰と関係性を持つイコン崇敬をより深く研究する余地は、たくさんあると言っている⁵⁶。さらに、第2バチカン公会議後のローマ・カトリック教会におけるテオトコスの「取り持つ」立場が重要な神学的問題となり、正教会との対話においても大きな影響を及ぼしている。⁵⁷ 一方、長老派教会の教師であるロバート・M. ブラウンは「教皇の問題に次いで、マリア神学がカトリックとプロテスタントの神学的意見の不一致の領域である」⁵⁸と述べている。つまりキリスト教におけるテオトコスの神学的立場は、これからのキリスト教の神学やキリスト教学において、非常に重要な問題となっていくに違いない。

当然ながら、本論文の範囲内でパヴェル神父の思想を最大限に紹介し、またテオトコスとイコンの立場を完全に明らかにすることはできないが、次のことは明確に言える。テオトコスは私たちと神の間に立つ仲介者である。それはまるで階段のように私たちの世界と神の世界を結ぶ存在だと言える。パヴェル神父にとってテオトコスのこの取り持つ力の具体的な形とは、私たちの証人であることである。それはイコンと全く同様で、テオトコスとそのイコンが同一のものなのである。テオトコスが私たちの証人であることが抽象的な

意味を持つのではなく、具体的な現象である。イコンが生きものとなり、私たちの前に現れたテオトコスという証人を通して私たちは、大主教イパティオスの言う「霊的な光」を体験できるし、奇跡が起こることが可能になる。それはパヴェル神父の思想における根本的な教えである。パヴェル神父の考える世界の構造は、イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリが『神曲』の中で描写した構造とよく似ており、パヴェル神父は数多くの神学・芸術学・数学・言語学的著書において、それを解釈している。

ⁱ Никодимъ Павловичъ Кондаковъ, “Иконографія Богоматери”, Томъ I, Изданіе Отдѣленія Русскаго языка и Словесности Императорской Академіи Наукъ, С.-Петербургъ, (コンダコフ・ニコディム＝パヴロビッチ『生神女の図像学』) 1914, С. 13

² Там же

³ コリントの信徒への手紙 一、15章45節では、「キリストが最後のアダム」、ローマの信徒への手紙5章14節では、アダムは「来るべき方を前もって表す者」だとされ、教会教父たちはキリストを「新しいアダム」、マリアは「新しいエバ」だとしている。聖イリネウス『異端反駁』やユスティノス『ユダヤ人トリュフォンとの対話』100章、Сергей Сергеевич Аверинцев, “Поэтика ранневизантийской литературы”, Кода, Москва, 1997, С. 81 (アヴェリンツェフ・セルゲイ＝セルゲエヴィッチ『初期ビザンチウム文学の詩学』)などを参照。エバは神の命令に背いたが、マリアは服従と信心によって救済の道を開いてくれる。正教会ではローマ・カトリック教会とは違い、マリア神学という教義学的分野を持たず、マリアに関する教えは教父たちの時代からキリスト論の中に属する。具体的に、マリアは神の言葉に同意したことが、神と人間の共働(συνέργεια)である。イエス・キリストはマリアの子供として受肉したことで、マリアは人間の救済と深く関わっていると思われる。

⁴ Franz Diekamp, “Analecta patristica: Texte und Abhandlungen zur griechischen Patristik”, Pont. Institutum Orientalium Studiorum, 1938

⁵ カヴァルノス(1999) С. カヴァルノス『正教のイコン』、高橋保行訳、教文館、1999年、33頁

⁶ フロレンスキイ・パヴェル神父(1882～1937)は、コーカサス地方エヴラフで、ロシア人エンジニアの父アレクサンドルと貴族出身でアルメニア人の母サロメの間に生まれる。モスクワ帝国大学物理・数学科を卒業したのと同時に、モスクワ神学校に入学。その後ロシア正教会で神父の職に就く。1917年2月に起きたロシア革命と11月に起きたボルシェヴィキによるクーデターで宗教的迫害が高まったため、教会やイコンなどを保護するために奔走する。5年間強制収容所に囚われの身となった後の1937年、殺害され、殉教者となる。

⁷ Peter Brown, «A Dark-Age crisis: aspects of the Iconoclastic controversy» (The English Historical Review, January 1973), Norman H. Baynes, «The Icons before Iconoclasm» (The Harvard Theological Review, Vol. 44, No. 2, April, 1951), Paul J. Alexander, «Hypatius of Ephesus: A Note on Image Worship in the Sixth Century», Harvard Theological Review, Volume 45, Issue 03, July 1952

⁸ Brown, op. cit., pp. 12-13

⁹ Louis Bréhier «Vie et Mort de Byzance», L'évolution de l'humanité, Éditions Albin Michel, Paris, 1948, Copyright Albin Michel, 1946, p. xiii

¹⁰ Ibid., p. 73

¹¹ Dame Averil Cameron, “Images of Authority: Elites and Icons in late Sixth-Century Byzantium”, Past and Present (1979) 84, p. 21

¹² Ibid., 28

¹³ Ibid., 18

¹⁴ Dame Averil Cameron, “The Theotokos in Sixth-Century Constantinople: A City Finds its

-
- Symbol”, (The Journal of Theological Studies, Vol. 29, No. 1, April 1978, pp. 79-108), p. 79
- ¹⁵ Ibid.
- ¹⁶ Ibid.
- ¹⁷ Brown 1973, op. cit. p. 2
- ¹⁸ Θεοφάνης ο Ομολογητής, «Χρονογραφία» (テオファネス『年代記』), (έκδ. C. de Boor, Lipsiae 1883)
- ¹⁹ Brown 1973, op. cit. pp. 3-4
- ²⁰ Cameron 1978, op. cit. p. 79
- ²¹ Hilda Graef, «The devotion to Our Lady», Twentieth century encyclopedia of Catholicism; v. 45, Hawthorn Books, 1963, p. 35
- ²² Cameron, op. cit., p. 86
- ²³ Ibid.
- ²⁴ Graef, op. cit., p. 32
- ²⁵ Jean Guitton, “La Vierge Marie”, Livre de vie; 13, Éditions Montaigne, (ジャン・ギトン『童女マリア』) 1949, p. 133
- ²⁶ 日本聖書協会日本国際ギデオン協会訳、ルカによる福音書 1 章 38 節
- ²⁷ Leo Joseph Suenens, «Mary the Mother of God», Twentieth century encyclopedia of Catholicism; v. 44, Hawthorn Books, 1959, p. 33
- ²⁸ Jean Daniélou, “Le mystère de l'Avent”, Éditions du Seuil, 1948, p. 112
- ²⁹ テモテへの手紙— 2 章 5 節
- ³⁰ Ирина Евгеньевна Данилова, “Фрески Ферापонтова монастыря”, Искусство, Москва, (ダニロヴァ=イリナ・エヴゲニエヴナ『フェラポントフ修道院のフレスコ画』) 1970
- ³¹ Guitton, op. cit, p. 164
- ³² Cameron, op. cit., p. 104
- ³³ Graef, op. cit., p. 37
- ³⁴ Свящ. Павел Флоренскій, “Столпъ и Утвержденіе Истины. Опытъ православной еодицеи въ двѣнадцати письмахъ.”, Москва, (フロレンスキイ・パヴェル神父『真理の柱と基礎』) 1914 г., С. 122
- ³⁵ Там же, С. 41
- ³⁶ Священник Павел Флоренский, “Сочинения в четырех томах”, Том 1, Философское Наследие, Том 122, Издательство Мысль, Москва, (フロレンスキイ・パヴェル神父『全四巻』、一卷、シリーズ「哲学的遺産」122 巻、ムィースリ出版、モスクワ) 1994, С. 51-52
- ³⁷ Там же, стр. 56-57
- ³⁸ Флоренскій 1914, Цит. раб. С. 168
- ³⁹ Священник Павел Флоренский, “Сочинения в четырех томах”, Том 2, Философское Наследие, Том 124, Издательство Мысль, Москва, (フロレンスキイ・パヴェル神父『全四巻』、二巻、シリーズ「哲学的遺産」124 巻、ムィースリ出版、モスクワ) 1996, С. 450
- ⁴⁰ Там. же
- ⁴¹ Там же, С. 406, Кондаковъ, Цит. раб.
- ⁴² Флоренский 1996, С. 397
- ⁴³ Maryline G. Parca, “Ptocheia, or, Odysseus in disguise at Troy”, Scholars Press, 1991, Atlanta, “P. Köln VI 245”
- ⁴⁴ Флоренский 1996, С. 403
- ⁴⁵ Там же, 405
- ⁴⁶ Там же
- ⁴⁷ Там же
- ⁴⁸ Платон『ティマイオス』29B、プラトン全集〈12〉ティマイオス・クリティアス、種山 恭子訳、岩波書店、1975 年
- ⁴⁹ Gary A. Anderson, Ruth A. Clements, David Satran, «New Approaches to the Study of Biblical Interpretation in Judaism of the Second Temple Period and in Early Christianity»,

Brill, 2007, p. 46

⁵⁰ Παναγιώτης Νέλλας, «Ζῶον θεούμενον. Προοπτικές για μία ὀρθόδοξη κατανόηση τοῦ ἀνθρώπου», ἔκδ. Ἀρμός, Ἀθήνα, (Παναγιώτης· Νέλλας 『神格化された被造物』、アルモス出版、アテネ) 2000, σελ. 23

⁵¹ Флоренский 1996, С. 439 ἄν

⁵² Там же, С. 441

⁵³ Там же, С. 460

⁵⁴ Там же, С. 516

⁵⁵ Там же, С. 465

⁵⁶ Cameron 1978, op. cit., p. 80

⁵⁷ 第 265 代ローマ教皇ベネディクト 16 世の著書 “Maria - Kirche im Ursprung”, Johannes Verlag, Einsiedeln, Freiburg, 1997 を参照

⁵⁸ Robert McAfee Brown, “Robert McAfee Brown The Ecumenical Revolution: An Interpretation of the Catholic-Protestant Dialogue”, Doubleday, 1967, p. 298